

あとがき

「旅の図書館」
館長
福永香織

当財団において、これまで古書の存在はほとんど認識されていなかった。閉架資料であるがゆえ、誰もが見られる場所になかったこと、システム上で図書登録されたのがほんの5年前であることも要因かもしれない。

2016年に研究本部と一体となり移転・リニューアルオープンすることになり、観光に特化した独自の分類方法を導入した。その際に、あわせて古書の分類作業もおこなった。当時まだ図書館の担当ではなかった私は、古書分類作業のために広げられた、妙にセンスの良い古書の表紙や興味深いタイトルを見て、とても興奮したことを覚えていた。

無事移転も終わり、新しい図書館の運営が落ちつきはじめた2017年度に入り、「所蔵古書の概要把握と保

存・活用に関する研究」に着手した。その背景には、多くの先生方から当館の古書の価値を教えていただいたこと、書誌データの精度が不十分であったこと、今ある古書をなるべく劣化させず、できるだけ良い状態で次世代に引き継いでいく必要があること、観光に特化した専門図書館である当館だからこそ観光関連古書の充実も検討しなければならぬことを認識したためである。

そして、書誌データの修正作業や古書のデジタル化、保存箱の作成などに着手したが、特に、旅行案内書、国立公園、登山、温泉など分野ごとの歴史を概観し、当館古書の収蔵状況と追加で入手すべき古書のピックアップなどをおこなった過程では様々な発見があった。その成果は館内の古書展示ギャラリーで定期的に展示し紹介している。

ところで、古書というと単純に古い本というイメージを持たれる方もいるかもしれないが、当時の本や雑誌の位置づけは現在と異なる。インターネットやテレビなどが無い当時、本や雑誌は今以上に力のあるメディアであり、コミュニケーションツールの一つでもあった。特に雑誌「国立公園」や「ツ

ーリスト」に代表されるような定期刊行物は、誌面上で最新状況が報告されていたことに加え、最前線で活躍する研究者や実務者によって活発な議論が展開されていた。媒体が限られていた当時においては、これらの雑誌が情報共有や意識醸成にも大きな役割を果たしていたと考えられる。

では時代を経た今、古書をどう捉えたらよいかということについては各章で先生方にご執筆いただいたところであるが、巻頭言で西村先生が提示してくださった2つの視点を元に整理すると、以下のようなになるだろうか。

古書から「現代人の思想の萌芽を見出そうという姿勢」については、例えば、多くの人びとが世界を移動する観光の新时代に、極東アジアの国が何をすべきか、そして国際観光と民間交流はどのようなべきか、という大局的な観点に立った木下淑夫の思考（1章）や、国土計画に国立公園や道府県立公園などを予め国土計画に位置付けるべきと訴えた田村剛の視点（2章）、「人」のつながりを大切にして日本の姿を正しく伝えることに尽力した国際観光局の視点（5章）などが挙げられる。

当時、どのようにして100年後にも通じる哲学やビジョンが生まれえたのかが気になるころではあるが、共通点として考えられるのは、それぞれを取り組みの目的が国際社会における日本のプレゼンスの向上や日本人の豊かな生活の実現などであり、観光はそれらを実現するための手段であったということである。当時のキーマンの哲学や熱意、行動力を見てみると、今の日本は観光を通して何を実現しようとしているのか改めて考えさせられる。観光の黎明期を作り上げた先人の真摯な「姿勢」と「先を見通す力」、「利用者本位の意識」こそ、いま我々が学ぶべき点かもしれない。

さらにもう一つの「現代では失われてしまった思想や活動を見出すという姿勢」については、名所図会や道中記などをルーツにマニュアル型・イメージ喚起型に発展してきた日本の旅行案内書の特徴や、移住先の情報を記した地誌としての役割が旅行案内書にあったこと（1章）、緻密な計画に基づき指定されていた国立公園（2章）国際観光ホテル整備の経緯（3章）、お雇い外国人などのアドバイスを受けながら発展していった日本の温

泉地（4章）、ターゲットを見据え、戦略的に海外へ情報発信をおこなっていた国際観光局の取り組み（5章）などが挙げられる。

こうした活動や経緯をひもとくことで、戦前は意外にも諸外国との交流が活発に行われており、海外の先進的な旅行案内書や観光施策を参考にしていたことなど、様々なことが見えてくる。

もちろん、過去や古書が全て優れているという訳ではなく、今とは異なる時代背景で行われていた取り組みを現代で取り入れるべきだという訳ではない。しかし、こうした古書を取りまく状況を概観して感じたことは、過去をイメージで語りがちであること、そして、日本の観光が歩んできた経緯が十分に明らかにされておらず、かつ掘り起こされた歴史が「いま」を研究している人や実務者に共有されていると、言い難いことであった。

今回の観光文化の特集テーマを「古書から学ぶ」に設定したのは、古書から得られる発見や現代でも通用する先人の考え方が意外にも多いことを知っていただけだかと思っただけである。いま、日本の観光をとりまく状況はめまぐるしく変化している。より新しい

取り組みをおこなっていくためにネットや雑誌などから最新の情報を入手することも重要であるが、歴史をひもとくことで見えてくる「いま」と「これから」もある。100年先でも通じる考え方や日本ならではの観光のあり方のヒントを得る、そして自分の尺度を広げる上では古書も大きな力になってくれるのではないだろうか。

2018年10月11日、当館は開設から40年を迎える。「観光はそれ自体が文化であり、その観光文化を向上させたい」という開設当時の想いは大切にしながら、人、知、情報が集まる観光研究・情報のプラットフォームとして、これまでの図書館のスタイルにとらわれない様々な取り組みにチャレンジしている。実践的学術研究機関の図書館として新旧にかかわらず、時代を越えて伝えていくべきことを発信していきたい。そして、「旅の図書館に行けば『研究の種』や『現場に活かすヒント』が見つかる」と言っていただけのような、観光に携わる全ての人の力になれる図書館でありたい。今後も引き続き、ご愛顧、ご指導いただければ幸いです。

